# 『伊勢物語』八五段考―「思へども」の歌と親王

飯田さやか

## 一　はじめに

『伊勢物語』八五段は、八二、八三段と続いた惟喬親王章段の最終部に位置し、出家した親王のもとに、正月には必ず訪れるという男の姿が描かれる。

むかし、男ありけり。わらはより仕うまつりける君、御ぐしおろしたまうてけり。正月にはかならずまうでけり。おほやけの宮仕へしければ、つねにはえまうでず。されど、もとの心うしなはでまうでけるになむありける。むかし仕うまつりし人、俗なる、禅師なる、あまた参り集りて、正月なればことだつとて、大御酒たまひけり。雪こぼすがごとふりて、ひねもすにやまず。みな人酔ひて、雪にふりこめられたり、といふを題にて、歌ありけり。

思へども身をしわけねば目離れせぬ雪の積もるぞわが心なる

とよめりければ、親王、いといたうあはれがりたまうて、御衣ぬぎてたまへりけり。

（『伊勢物語』、一八八～一八九頁）

「むかし仕うまつりし人」「俗なる」「禅師なる」人々が多く集まる中、「雪にふりこめられたり」という題で、男は「思へども身をしわけねば目離れせぬ雪の積もるぞわが心なる」と詠んだ。親王はこの歌にいたく感激し、男へ御衣を下賜する。御衣の下賜は言うまでもなく歌への反応としては最上級のもので、親王の「いといたうあはれ」という感激の発露としてある。(注1)

従来、この歌は第一、二句が同様である『古今和歌集』(以下『古今集』)「思へども身をしわけねば目に見えぬ心を君にたぐへてぞやる」(巻第八、離別歌、三七三番歌)を引いたものと解されてきた。『古今集』三七三番歌を共通認識としてもちつつも、その一方で男の詠んだ歌の解釈は分かれており、訳が定まっていない。特に、第三句「目離れせぬ」の解釈は様々であり、その下に続く第四、五句「雪の積もるぞわが心なる」の部分も同様である。しかし、この歌を読み解けなければ、これほどまでに親王に感激される理由はわからない。

本稿では、八五段「思へども」の歌(以下、八五段歌)に注目し、第三句「目離れせぬ」および第四、五句「雪の積もるぞわが心なる」の解釈を明らかにすることで、親王の感激にいたる背景を考察する。

## 二 「目離れせぬ雪」の解釈

『伊勢物語』八五段は、出家した親王のもとに以前仕えていた人々が集う段である。(注2)一日中降る雪によって、帰ることができなくなった人々は「雪にふりこめられたり」という題で歌を詠む。その中で男が詠んだ歌が八五段歌であった。先に述べたようにこの歌をどう理解するか、諸注解釈が分かれている。(注3)その一つが「目離れせぬ雪」をめぐってである。この語について竹岡正夫氏の検討に従えば、注釈書における「目離れせぬ」は以下の三種に分類できる。(注4)

A. 降り続く雪(森本全釈・全書・全集・集成・新全集・新大系・鈴木評解)

B．目から離れずに積もる雪（ノート編・新解・大系・片桐全読解）

C．ずっとお会いしている（竹岡全評釈）

大半の注釈書は「目離れせぬ雪」をA「降り続く雪」と解する。その他、B「目から離れず積もる雪」とする大系や全読解があるが、これらの注釈書を踏まえて提示されたのが、C「ずっとお会いしている」とする竹岡氏の解釈である。氏は、「「目離る」とは、見ることが遠ざかる。逢わぬ日数が重なる。（中略）、雪が絶え間もなく降りしきる場合とか、目を離さずに雪をじっと見る場合などには、「目離る」とは言わないと考えられる。」ということから、「目離れせぬ」を親王と「ずっとお会いしている」とする。それぞれの理解にそって、この和歌を現代語訳するとひとまず次のようになろうか。

A．いつもお傍にいたいと思っていますが、この身を二つに分けることは出来ませんので、この降り続く雪が積もることが私の心にかなうことなのです。

B．いつもお傍にいたいと思っていますが、この身を二つに分けることは出来ませんので、今、目から離れないこの積雪のように思いが積もっているのが私の心なのです。

C．いつもお傍にいたいと思っていますが、この身を二つに分けることは出来ませんので、今日、雪が積もって帰れなくなって、宮様にずっとお会いすることができる、そのことは私の心にかなうことなのです。

そもそも「目離れせぬ」とは誰の「目」なのか。男なのか。親王なのか。周囲の人々か。「目離る」は、『角川古語大辞典』において「見ていない状態でいる。逢えないでいる。」とあり、「古代では、相手の目から離れて相手に見ら

れていない不安な状況の表現が主体であったが、中古になると、自分が見ていない場合にも用いられ、見る対象には物も含まれてくる。」と解説される。「見る」という動作の主体が誰なのか、「目で見ている」のは相手であるのか、自分であるのかという点がポイントなのである。そこで、古代から中古までの用例を確認しておきたい。[注5] 当該歌の理解に深く関わってくるからである。

「目離る」は『万葉集』に四例見える。

①佐保過ぎて　奈良の手向に　置く幣は　妹乎目不離（妹を目離れず）　相見しめとそ
（『万葉集』巻第三、三〇〇番、長屋王）

②あさぢはふ　妹目不数見而（妹が目離れて）　しきたへの　枕もまかず…（『同』巻第六、九四二番、山辺赤人）

③思ふ故に　逢ふものならば　しましくも　伊母我目可礼弖（妹が目離れて）　我居らめやも
（『同』巻第十五、三七三一番、中臣宅守）

④…たらちねの　波波我目可礼弖（母が目離れて）　若草の　妻をもまかず…
（『同』巻二〇、四三三一番、大伴家持）

『万葉集』における例は何れも、誰の目であるかが明記されている点が特徴である。①は「妹を目離れず」とあるように、妹を見るのは自分自身である。一方、②、③、④は妹または母の目である。『角川古語大辞典』の解説のとおり、見る動作をしているのは相手である例が大半であり、自分自身が見ている例は①三〇〇番歌のみである。

では中古に入ると、①のような自分自身が見る行為をする用例はどの程度あるのだろうか。『源氏物語』では「目

離る」は六例見える。

⑤源氏「…まことに、いかなりともとのどかに思ひたまへつるほどは、おのづから御目離るるをりもはべつらむを、なかなか今は何を頼みにてかは怠りはべらん…。」（『源氏物語』葵、六四頁）

⑥宮は、三条宮に渡りたまふ。御迎へに兵部卿宮参りたまへり。雪うち散り風はげしうて、院の内やうやう人目離れゆきてしめやかなるに、大将殿こなたに参りたまひて、古き御物語聞こえたまふ。（『同』賢木、九九頁）

⑦源氏「昨夜はしかじかして夜更けにしかばなん。例の思はずなるさまにや思しなしつる。かくてはべるほどだに御目離れずと思ふを、かく世を離るる際には、心苦しきことのおのづから多かりけるを、ひたや籠りにてやは…。」（『同』須磨、一七一頁）

⑧内大臣「…はかばかしき身にはべらねど、世にはべらん限り、御目離れず御覧ぜられ、おぼつかなき隔てなくとこそ思ひたまふれ…。」（『同』少女、四一頁）

⑨…さし並び目離れず見たてまつりたまへる年ごろよりも、対の上の御ありさまぞなほありがたく、我ながらも生ほしたてけりと思す。（『同』若菜上、七四頁）

⑩薫「宮のおはしまさむ世のかぎりは、朝夕に御目離れず御覧ぜられ、見えたてまつらんをだに」と思ひのたまへば、…。（『同』匂兵部卿宮、三一頁）

⑤は葵の上の死後、左大臣と源氏の会話である。「御目」とあるように、この場合見る行為の主体は相手、左大臣である。⑥は桐壺院の死後、ゆかりの女御や更衣が自邸へと下がっていき、院から人気がなくなるさまが描かれる。こ

の場合も相手が動作主体であるが、相手が不特定多数である点が特徴的である。⑦は源氏から紫の上への台詞である。この場合も紫の上が見る意である。⑧は内大臣と母である大宮の会話である。この場合の「御目」も大宮の目を指すため、見る行為をするのは相手であることが分かる。⑨は源氏が紫の上についてその素晴らしさを述べる場面である。「目離れず見たてまつりたまへる…」とあるように「自分の側から離さずにお育てしてきた…」といった意味になる。この場合、見ているのは源氏自身であろう。⑩はこれまでの大半の例と同様に、「御目」は宮（女三宮）を指す。以上の『源氏物語』の例のうち、⑨のみ、自身が見るという意で使われていることが明らかであり、『角川古語大辞典』の解説ように「自分が見ていない場合にも用いられ、見る対象には物も含まれてくる。」といった例は、まだ少数である。また、『源氏物語』に限って言えば、⑤、⑧、⑩といった明らかに相手の身分が上である場合は必ず、動作主体が相手であることが留意される。

すこし時代は下るが、『浜松中納言物語』や『夜の寝覚』のころになると、自分自身が見る行為をする用例が増えてくるようである。

⑪…若君の、何心なう走り遊び給ふなども、つねよりは目かれせず見給ひつつ、…。

（『浜松中納言物語』巻第四、三六五頁）

⑫いみじくあてに、をかしく、なまめきたるかたち、様は、姫君にも劣りきこえず、いとどただ上の、明け暮れ御目離れず、掻き撫でつつのみ夜をも明かさせたまふに、（中略）いとめづらしく、心やすかべきをさへ目離れず見ぬ契りもめづらかに、人に違ふ心地して見たてまつりたまふに、…。

（『夜の寝覚』巻四、四〇七頁）

⑪は、中納言が若君の遊ぶさまを見る場面である。また、⑫の「御目離れず」は帝がまさこ君を大層可愛がる描写で使われている。一方、その場面の直後に続く「目離れず」は寝覚の上がわが子をいつも傍で見守ることのできない運命を語る際に使われている。すべての例において、動作主体が自分自身である点が注目される。

では、『伊勢物語』八五段の「目離れせぬ」の主体は誰なのか。ここで、『伊勢物語』中で「目離る」の語が登場するもう一つの段である、四六段を見ていく。

むかし、男、いとうるはしき友ありけり。かた時さらずあひ思ひけるを、人の国へいきけるを、いとあはれと思ひて、別れにけり。月日経ておこせたる文に、

あさましく、対面せで、月日の経にけること。忘れやしたまひにけむと、いたく思ひわびてなむはべる。世の中の人の心は、a目離るれば忘れぬべきものにこそあめれ。

といへりければ、よみてやる。

b目離るとも思ほえなくに忘らるる時しなければおもかげに立つ（『伊勢物語』四六段、一五三～一五四頁）

非常に親しくしていた友人と、男との別れを描く段である。傍線aは、他の国へ行ってしまった親友から月日を経て送られてきた手紙の言葉である。「世の中の人の心」というのは逢わないでいると忘れてしまうという意であり、見る動作をするのは世の中の人、すなわち相手であると考えられる。傍線bの場合はやや難解であるが、ここも見る動作をするのは相手であるとするのが適当であろう。山本登朗氏[注6]は次のように指摘する。

すなわち「目」が自分の目の場合は、主人公は目の前に浮かぶ相手の「面影」をただこちらから見ているだけだが、「目」が相手の目の場合、主人公は自分が見ているその「面影」から、逆に見つめられ続けていることにもなるのである。「かた時さらず相思ひける」ほどの仲であった親友どうしの、肉親や恋人どうしにも似た濃密な心情のつながりを言う言葉としては、前者よりもむしろ後者の解釈のほうがふさわしいように思われる。

氏は、常に相手の視線が意識され、互いにそうすることで一方通行ではない心情の交流を描くことができると指摘している。

ここまで、『万葉集』、『源氏物語』、『浜松中納言物語』、『夜の寝覚』そして『伊勢物語』四六段の「目離る」の用例を見てきた。『浜松中納言物語』以降は、自分が相手を見る際に使われることが多いようであるが、大半の例において見る動作をするのは単数の相手の目である。複数の人物が見ることを表す用例もあるが、その場合は「人目離る」であり、自分自身を含めた複数の目を言う意味合いではない。そうした場合、「目離れせぬ雪」とは、「（男、親王を含めた）その場にいる私たち全員が見る雪」と解するのではなく、「親王の視線を常に受けている雪」と読むべきであろう。諸注釈書の解釈においては、誰が見ているのかが曖昧であり、元々の意味から離れて訳してしまっているが故に、分かりにくくなっている。また近年、「親王のことを忘れることなく、今年も訪れた雪、というふうに雪を擬人化した表現」との解釈もあるが、「目離る」の主体を「物」にしたものは用例として確認できない。[注7]「目」は親王の目であり、「親王の視線を常に受けている雪」として男は和歌に詠んだのである。

## 三　『古今集』との関わり

次に、第四、五句について見ていく。従来、八五段歌は、管見の限りすべての注釈書において『古今集』三七三番歌との関わりが指摘されている。

東の方へまかりける人によみてつかはしける　　伊香子淳行

思へども身をしわけねば目に見えぬ心を君にたぐへてぞやる　　（巻第八、離別歌）

東国へ下った人へ贈った歌である。諸注釈書においてこの歌の第一、二句「思へども身をしわけねば」を踏まえて八五段歌が作られたのだと解説されるとおり、第一、二句に続く「目に見えぬ心を君にたぐへてぞやる」の部分も八五段歌に響いている。『古今集』では「目に見えぬ心」であったものが八五段歌では「目離れせぬ雪」となり、引歌を意識すれば、「（目には見えない心とは違い）親王の視線を常に受けている雪」と解せる。そして八五段の「もとの心うしなはで」という記述と対応することで、雪に男の心、思いが重ねられていることが明らかとなる。三七三番歌「目に見えぬ」以下の句も踏まえることで、男の忠誠心はより一層強いものとして読むことができるのである。

では、八五段歌の第四、五句「雪の積もるぞわが心なる」はどのように理解したらよいのだろうか。注釈書では、二つに大別されるようである。

D．雪が積もって帰れなくなったのは私（男）の本望だとするもの（森本全釈・全書・ノート編・新解・全集・集成・新全集・竹岡全評釈・新大系・鈴木評解・片桐全読解）

E．積雪に積もる思いを重ねて解釈したもの（大系）

大井田晴彦氏はこのD・E部分の解釈の揺れについて指摘し、「この降り積もっている雪こそが、君を慕っている

私の心なのです、と解すべきではあるまいか。目に見えない貞節の心を、雪に寄せて示したのである。」とEの理解に沿って論ずる。[注8] 確かに、『古今集』三七三番歌をふまえた場合は、稿者もここはEがふさわしいと考えるが、八五段最終部の「いといたうあはれがりたまうて、御衣ぬぎてたまへりけり」という親王の反応に至る理由としては少し弱いように思えるのである。

ここで、近年の注釈書ではあまり触れられていなかった古注釈の指摘について検討したい。『古今集』九七八番、九七九番の贈答歌との関わりである。

宗岳大頼が越よりまうで来たりける時に、雪の降りけるを見て、「おのが思ひはこの雪のごとくなむ積もれる」と言ひける折によめる　　凡河内躬恒

君が思ひ雪と積もらば頼まれず春よりのちはあらじと思へば（九七八番）

返し　　宗岳大頼

君をのみ思ひこしぢの白山はいつかは雪の消ゆる時ある（九七九番）

まずは、この贈答歌に関して触れている古注釈書の記述をみていきたい。『伊勢物語愚見抄』[注9]では歌が『古今集』九七八番および詞書と「心おなじきなり」とし、『伊勢物語肖聞抄』[注10]では「宗岳大頼が歌を引給へり」と指摘している。また『勢語臆断』[注11]、『伊抄称名院注釈』[注12]、『志能夫数理』[注13]では類歌として九七八番歌を掲げている。『伊勢物語童子問』[注14]では詳細に記述がされ、「…そのうへ此歌は古今・離別の歌に、いかごのあつゆきが歌の上の句をとりて下の句は古今集雑下にむねをかのおほよりがこしよりまうできたりけるときに、雪のふりけるを見て「おのがおもひは此雪のご

とくなんつもれる」といひけるなどゝある詞などをとり合わせて一首の歌につくりあわせたる物故に、上下の首尾とくとは合ぬ也…。」とある。

この説に触れる指摘には、山田清市氏の論[注15]がある。氏は、八五段歌と『古今集』九七八、九七九番歌との関りについて、「詞書や歌句の発想に触発されて、一・二句に練り合わされたもの」とし、この手法は『伊勢物語』作者と目される紀貫之の歌[注16]にも見出せると指摘する。ただし、氏は手法についてのみ言及しており、内容の検討はされていない。また前掲の大井田氏も、雪に積もる思いを詠んだ類歌の一つとして引いている。しかし「心おなじきなり」、「宗岳大頼が歌を引給へり」という古注釈の指摘や、「雪」と「思ひ」の読まれ方を考えたとき、八五段の男の歌は、類歌にとどまらず、九七八、九七九番歌を引いたものとして読まなければならないのではないか。そこで、これら『古今集』歌を踏まえることで、何が見えてくるのか、以下検討したい。

一般的に雪は消えるものであるため、雪とともに消える「思ひ」や「わが身」を詠む歌が多い。

⑬白雪の降りてつもれる山里は住む人さへや思ひ消ゆらむ（『古今集』巻第六、冬歌、三二八番、壬生忠岑）

⑭かきくらし降る白雪の下消えに消えて物思ふころにもあるかな（『同』巻第十二、恋二、五六六番、壬生忠岑）

⑮逢はぬ夜の降る白雪と積りなば我さへともに消ぬべきものを（『同』巻第十三、恋三、六二一番、読人知らず）

⑯年の内に積もれるつみはかきくらし降る白雪とともに消えなん（『貫之集』二二番）

⑬は白雪が山里を覆い隠すとともに、人の思いも隠して消してしまうことを、⑭は積もった雪が、目には見えない下のほうから消えていくことを踏まえ、自らの心も人知れず消えるものとして詠んでいる。⑮、⑯も同様に雪とともに

消えるわが身や罪を詠んでいる。このように、雪に自らの思いを重ねることは、思いが消えてしまうといった意味にとられかねないのである。八五段において、親王のもとへ「もとの心うしなはでまうでける」男の心や思いを雪に重ねるとすれば、それは消えない雪でなければならない。

だからこそ『古今集』九七八、九七九番歌が重要になってくる。九七八、九七九番歌の雪は「越路の雪」である。宗岳大頼の「をのが思ひはこの雪のごとくなむ積もれる」という言葉に対し、凡河内躬恒は従来の雪のイメージに沿って、春には消えてしまうものと詠んだ。それに対して大頼は、自らの思いは「越路の雪」であると詠み、通常の雪と異なり、「いつかは雪の消ゆる時ある」と消えない雪に重ねたものであるとした。

越路は越の国への道のことであるが、越の地そのものも指し、必ずと言っていいほど雪と詠まれた。「越の白山」「白山」などといった場合も越路の雪と同様の意で詠まれた。その雪は春になっても深く、次のような例が見える。

⑰雪深く春とも見えぬ越路にも折りし梅こそ花咲きにけり（『中務集』三一、九九番）

中務が越へ赴任する源順へ贈った歌である。この歌からは、雪深く、春が来たことも分からない越路の様がうかがえる。この雪は、春だけでなく夏も溶けず、再び冬を迎える万年雪であった様子が次の二首に見える。

⑱あらたまの年をわたりてあるが上に降り積む雪の絶えぬ白山（『後撰集』第八巻、冬、四八二番、読人不知）

⑲白山に降る白雪の去年の上に今年も積もる恋もするかな（『古今六帖』第一、雪）

また、九七八番歌を詠んだ凡河内躬恒は次のような歌も詠んでいる。

⑳　越国へまかりける時、白山を見てよめる

消えはつる時しなければ越路なる白山の名は雪にぞありける

（『古今集』巻第九、羇旅歌、四一四番、凡河内躬恒）

こうした消えないイメージを持つ越路の雪が、八五段歌の第四、五句の背景にあるとすれば、男の忠誠心はいっそう強いものとして訴えかけてくるのではないだろうか。八五段歌「雪の積もるぞわが心なる」の背景に、九七八、九七九番歌の詞書「をのが思ひはこの雪のごとくなむ積もれる」が見出せることから、男の「わが心（忠誠心）」もまた、「越路の白雪のように消えない」ものであると言えよう。そして八五段歌は『古今集』の三首の歌を巧みに取り込み、強固な自らの忠誠心を詠んだ秀逸な歌、ということができるのである。このことを踏まえれば、親王の「いといたうあはれがりたまうて、御衣ぬぎてたまへりけり。」という反応もごく自然のものとして見えてくる。八五段歌は「いつもお傍にいたいと思っていますが、この身を分けることは出来ません。せめてこのように常にあなたの視界にある雪のように、私の心は常にあなたのお傍にあると思ってください。そして、雪のように積もる私の心（思い）は、消えないということで有名なあの越路の白雪のように、消えることはないものなのです。」と解釈できよう。

## 四　惟喬親王と雪―八三段との比較から

ここまで、八五段歌「思へども身をしわけねば目離れせぬ雪の積もるぞわが心なる」は、『古今集』三七三番歌だ

けでなく九七八、九七九番歌をも踏まえてこそ、親王が感激した理由が見えることを述べてきた。最後に、同じく惟喬親王章段の一つである八三段と八五段の比較を通して、八五段の親王の思いについて考察してみたい。

むかし、水無瀬に通ひたまひし惟喬の親王、例の狩しにおはします供に、馬の頭なるおきな仕うまつれり。日ごろ経て、宮にかへりたまうけり。御おくりしてとくいなむと思ふに、i大御酒たまひ、禄たまはむとて、つかはさざりけり。この馬の頭、心もとながりて、

枕とて草ひきむすぶこともせじ秋の夜とだにたのまれなくに

とよみける。時は三月のつごもりなりけり。親王おほとのごもらで明かしたまうてけり。かくしつつまうで仕うまつりけるを、思ひのほかに、御ぐしおろしたまうてけり。ii正月におがみたてまつらむとて、小野にまうでたるに、iii比叡の山のふもとなれば、雪いと高し。しひて御室にまうでておがみたてまつるに、つれづれといとものの悲しくておはしましければ、やや久しくさぶらひて、いにしへのことなど思ひいで聞えけり。iv さてもさぶらひてしがなと思へど、おほやけごとどもありければ、えさぶらはで、夕暮にかへるとて、

v 忘れては夢かとぞ思ふおもひきや雪ふみわけて君を見むとは

vi とてなむ泣く泣く来にける。

（『伊勢物語』八三段、一八六～一八七頁）

次の表に示すように、八三段と八五段は対応する箇所が非常に多い。

〈表A〉

| | 八三段 | 八五段 |
|---|---|---|
| i | 大御酒たまひ、禄たまはむとて、 | 正月なればことだつとて、大御酒たまひけり。 |
| ii | 正月におがみたてまつらむとて、小野にまうでたるに | 正月にはかならずまうでけり。 |
| iii | 比叡の山のふもとなれば、雪いと高し。 | 雪こぼすがごとふりて、ひねもすにやまず。 |
| iv | さてもさぶらひてしがなと思へど、おほやけごとどもありければ、えさぶらはで、夕暮にかへるとて、 | 雪にふりこめられたり |
| v | 忘れては夢かとぞ思ふおもひきや雪ふみわけて君を見むとは | 思へども身をしわけねば目離れせぬ雪の積もるぞわが心なる |
| vi | とてなむ泣く泣く来にける | とよめりければ、親王、いといたうあはれがりたまうて、御衣ぬぎてたまへりけり。 |

iの親王が大御酒を振舞う展開、iiの正月という季節の設定、iiiの雪の描写などは非常に似通っているといえる。それだけにiv、v、viは対照的な描写が浮かびあがってくる。ivは親王の元に訪れた男が帰るにあたっての場面である。八三段では、まだ居たいけれど帰らなくてはならない男が描かれ、対して八五段では雪がやまずに帰れなくなってしまった様が描かれる。ここを契機として、話は異なった展開をしていく。vはそれぞれの段で男が詠んだ歌である。

八三段において、心ならずも帰る時間になってしまった男は歌を詠む。その歌は、親王が出家したことを受け止めきれず、悲しむ心情が詠まれる。その後、viにあるように男は「泣く泣く」帰っていく。それに対して八五段では、男は帰ることが出来なくなった原因である雪に、自分の思いを重ね、強い忠誠心を訴えかけている。ここまでに確認したように、この歌の雪は「親王の視線を常に受けている雪」であり「越路の白雪のように消えない雪」である。いつまでもここにあって、消えることがなければ、自分たちも帰らずにそばにいることが出来る、そんな思いも垣間見えてくる。

また、八五段が八二、八三段と八五段と続いた惟喬親王章段の最終段であることも考慮すると、「いといたうあはれがりたまうて、御衣ぬぎてたまへりけり」という親王の反応は章段全体へ響いてこよう。八五段は表Aで確認した似通った表現や、文中の語の一致などから、八三段を引き継いで書かれていると考えられている。[注17] また、八五段前半部の「おほやけの宮仕へしければ、つねにはえまうでず」という文が前段である八四段の「子は京に宮仕へしければ、まうづとしけれど、しばしえまうでず」という文に酷似している。八四段は男とその母宮の交流が描かれる段である。惟喬親王章段の間に配され、やや話がそれた印象がある段であるが、多忙な宮仕えの合間に自身の母や主人に会いに行く男の姿が描かれる点では共通している。このことから、八二、八三、八四段のあらゆる面を取り込んで八五段は構成されているといえる。山田清市氏[注18]は、『伊勢物語』の構成者が「八四段をすでに書き終えた段階で、改めて一段前の惟喬親王章段の延展をはかる気持が動いた」と指摘する。つまり八五段には、惟喬親王章段の総括段としての役割が見出せるのである。[注19] 八二段は「渚の院」として知られ、出家前の親王と周辺の人々の交流を描く著名な段である。渚の院の桜、天の河の辺で歌を詠み、最後に水無瀬の離宮に至って宴をする一日が描かれる。八三段前半も同様に、「例の狩」をする親王と供の「馬の頭なるおきな」の様子が描かれる。八二段と変わらぬ華やかさが続くかと見せ、親王

は「思ひのほかに」出家してしまう。以降後半部は、八二段から引き続き描かれた華やかさは影を潜め、雪が高く積もった地で徒然と暮らす親王の様子が描かれ、男は深い悲しみの中、都へと帰っていく。八三段で語りつくされたかに見える惟喬親王と男の交流は、八四段を挟んで多忙な宮仕えの合間を縫う男という要素を取り込んで、再び八五段で語られる。八二段で語られた、出家前の親王の華やかな交流を想起させるかのような八五段は、八三段とは対照的に喜びの中に幕を閉じる。八五段最終部、親王の「いといたうあはれがりたまうて、御衣ぬぎてたまへりけり」という反応は、一度は失ったかに思えた臣下の忠誠心を目の当たりにした感激であり、惟喬親王章段全体の流れを踏まえることで一層際立ったものとして理解できるのである。

## おわりに

以上、『伊勢物語』八五段歌について、第三句「目離れせぬ」の語の再検討および第四、五句「雪の積もるぞわが心なる」と『古今集』三七三番歌、九七八、九七九番歌との関わりから考察してきた。

「目離れせぬ」つまり「目離る」の語は、平安時代中期までは「相手が自分を見る行為」を指し、『伊勢物語』において見る動作をする主体は相手である可能性が高いことを指摘した。つまり、八五段において雪を見ているのは惟喬親王であるといえよう。また、従来引歌と指摘されてきた『古今集』三七三番歌だけでなく、八五段歌の第四句以下「雪の積もるぞわが心なる」には『古今集』九七八、九七九番歌を踏まえて読む必要があることを確認した。『古今集』三七三番歌を踏まえるだけでは強調されない「男の忠誠心」が、九七八、九七九番歌の「越路の雪」を連想させることでより強固なものとして親王に訴えかけたのである。

また、八五段を惟喬親王章段の総括段として見たとき、親王の華やかな日々を描いた八二段を再び想起させる段と

読むことが出来る。八三段では、親王の出家から小野の地でのひっそりとした暮らしが記述された。八五段はそうした八三段と非常に似通いながらも異なった展開をすることで、親王と周辺の人々の変わらぬ交流、そして男の強い忠誠心を描くことに成功している。親王の「いといたうあはれがりたまうて、御衣ぬぎてたまへりけり」という反応は、三首の歌を踏まえた男の巧みな歌と、八二段から八五段に至る経過すべてに対する感激であったと解釈できる。

※本文の引用は『新編日本古典文学全集』（小学館）による。和歌は『新編国歌大観』により、一部表記を私に改めた。

（注1）『源氏物語』須磨巻には、須磨に流離する光源氏が、朱雀帝から賜った御衣を身から離さずに傍に置いている描写がみえる。歌に関わる下賜ではないが、「御衣」を賜った側の喜びの大きさが見てとれる。

（注2）八五段に関しては、段そのものよりも成立時期を含め惟喬親王章段における位置づけをめぐっての論考が多い。以下にその一部を紹介する。

①竹岡正夫「一語の解釈の相違から―伊勢物語第85・86・90・91段の解釈―」（『香川大学一般教育研究』13、一九七八・三）
②市原愿「惟喬説話における業平の座標」（『伊勢物語生成序説』明治書院、一九七七所収）
③山田清市「『伊勢物語』惟喬親王段をめぐって」（『文学・語学』127、一九九〇・十一）
④仁平道明「『伊勢物語』惟喬親王章段の方法」（『日本文芸の潮流』おうふう、一九九四所収）
⑤吉山裕樹「伊勢物語八五段について」（『たまゆら』26、一九九四・十二）
⑥河添房江「伊勢物語を読む・惟喬親王に親しむ」（『別冊国文学・竹取物語伊勢物語必携』学燈社、一九九八・五）
⑦根本智治「惟喬親王譚の論理」（『伊勢物語の表現史』笠間書院、二〇〇四所収）
⑧大井田晴彦「伊勢物語・惟喬親王章段の主題と方法」（『国語と国文学』85－9、二〇〇八・九）
⑨阿部好臣「雪の織り成す心象―末摘花巻と『伊勢物語』惟喬章段」（『物語組成論』笠間書院、二〇一一所収）

⑩古川翼「幻想の天皇としての惟喬親王―「御ぐしおろしたまうてけり」の意味するもの―」（『学芸古典文学』5、二〇一二・三）
⑪森野正弘「『伊勢物語』惟喬親王章段における時間の構造」（『日本文学』65（4）、二〇一六・四）
（注3）今回確認した注釈書とは以下のものである。『日本古典全書』（朝日新聞社：南波浩校注）、『伊勢物語全釈』（大学堂：森本茂著）、『折口信夫全集・ノート編』（中央公論社：折口信夫著）、『伊勢物語新解』（白帝社：中田武司、狩野尾義衛著）『日本古典文学全集』（小学館：福井貞助）『新潮日本古典集成』（新潮社：渡辺実校注）、『伊勢物語全評釈』（右文書院：竹岡正夫著）、『日本古典文学大系』（岩波書店：大津有一、築島裕）、『新編日本古典文学全集』（小学館：福井貞助校注）、『新日本古典文学大系』（岩波書店：秋山虔校注）、『伊勢物語評解』（筑摩書房：鈴木日出男著）『伊勢物語全読解』（和泉書院：片桐洋一著）
（注4）注2、①および竹岡正夫『伊勢物語全評釈』右文書院、一九八八
（注5）今回は以下の作品を対象として調査した。『万葉集』、『竹取物語』、『大和物語』、『平中物語』、『土佐日記』、『蜻蛉日記』『うつほ物語』、『落窪物語』、『堤中納言物語』、『枕草子』、『源氏物語』、『和泉式部日記』、『紫式部日記』、『更級日記』、『讃岐典侍日記』、『浜松中納言物語』、『夜の寝覚』
（注6）山本登朗「見られることと見ること―「目離る」覚え書―」（山本登朗『伊勢物語評論』笠間書院、二〇〇一所収）
（注7）注2、⑧および田原加奈子「お別れの歌・・・と見せかけて（目離れせぬ雪・八十五段）」（早稲田久喜の会編、学びを深めるヒントシリーズ『伊勢物語』明治書院、二〇一八所収）
（注8）注2、⑧。なお、第四句が「雪のとむるぞ」である歌が『古今六帖』（第一、雪、七二三）にある。氏は、第四句が「雪のとむるぞ」であれば、Dのように解せざるを得ないと指摘している。
（注9）片桐洋一編『伊勢物語古注釈大成』第三巻、笠間書院、二〇〇八所収
（注10）注9
（注11）築島裕　他編『契沖全集』第九巻、岩波書店、一九七四所収
（注12）片桐洋一編『伊勢物語古注釈大成』第四巻、笠間書院、二〇〇九所収
（注13）片桐洋一編『伊勢物語古注釈大成』第五巻、笠間書院、二〇一〇所収

（注14）片桐洋一編『伊勢物語古注釈書コレクション』第四巻、和泉書院、二〇〇三所収
（注15）注2、③
（注16）氏は、『拾遺集』巻十三恋三、八一一番歌「わすらるる時しなければ春の田を返す返すぞ人はこひしき」は『古今和歌集』巻十一恋一、五一四番歌「わすらるる時しなければあしたづの思ひみだれてねをのみぞなく」（よみ人しらず）および五一五番歌「唐衣ひもゆふぐれになる時は返す返すぞ人はこひしき」（よみ人しらず）を合わせた発想歌であると指摘する。
（注17）注2、③
（注18）注2、③
（注19）なお、片桐洋一氏は注3にあげた注釈の中で、八十五段は「第八十三段とは異なるケースを示している」と、八十五段を別伝承として伝える物語の方法と解す。